

ぞうだんあまよのしちぐら
雑談雨夜質蔵

(104-49) 2冊

雨のそぼ降る静かな夜、ある質屋の蔵から話し声が聞こえます。蔵に収められた質物の品々が、雨の夜の退屈しのぎにおのおのの来歴を語り合おうというのです。互いに遠慮して先を譲りあう中、進み出たのは「初音」という銘の小さな茶入。諸道具たちは茶入の昔語りにも耳を傾けます。

茶入は京都北山の佐々木家の家宝でした。ある時、院がこの茶入をご上覧になることになり、近臣の守山伊太八と侍女の斧柄が管理を命じられました。ところが愛し合う二人が逢瀬に夢中になっている間に、茶入はくせ者に盗まれてしまいます。伊太八と斧柄は手討ちとなるはずでしたが、そ



▶蔵の中の質物が寄り集まり、身の上を語らう様子。中央が「初音の茶入」。

れぞれの父母が自分の命と引き換えに2人を逃がします。一方茶入は、盗んだくせ者（実は伊太八をねたむ家中の者が雇った盗人）の手から、横取りを図った大盗賊の日本左衛門の手へと渡ります。さて伊太八と斧柄は、命を狙われたり悪党にさらわれたりなどさまざま苦難に遭いながらも、ついに日本左衛門を討伐し、みごと茶入を取り戻します。茶入は無事に院の上覧に入れられ、伊太八は帰参がかない斧柄とも結婚し、めでたしめでたしと相成ったのでした。本書は江戸時代後期に人気を博した大衆文芸、合巻の一作品で、安政3（1856）年の出版です。筆者は人情本で名高い戯作者の為永春水。質蔵の道具が身の上を語るという趣向が面白いですね。

シリーズ 62
西尾の古と探る

徳川吉宗を支えた松平乗邑

大給松平十代の松平乗邑は、5歳にして家督を継ぎ肥前唐津藩主となりました。その後、志摩鳥羽藩、伊勢亀山藩、山城淀藩を転封。37歳の時に大坂城代理に付き、翌享保8（1723）年には、乗邑の才能を見込んだ將軍吉宗による異例の大抜で、38歳の若さにて老中となりました。

大岡忠相は乗邑を評して「才知敏捷にして、拙者ごときは梯子をかけても追いつかぬ」と言っており、『徳川実紀』にも「才賢く、何ごとも滞りなく老中までのぼり、国事に奔走して、少しも私心がない」と記されています。

元文2（1737）年、幕府財政を預かる勝手掛老中を命じられ、吉宗の進める財政改革や米価対策など幕政全般を切り盛りしました。幕府財政の再建に乗り出した乗邑は、腹心の勘定奉行神尾春央と

もに年貢増徴を目指し、収税法を定免法から有毛検見法に改め、年貢高を飛躍的に増加させました。

一方、乗邑は『御定書百箇条』の判例が公正であるよう吉宗と公事方御定書の編さん実務機関の間に入って編さんに尽力し、寛保2（1742）年には『公事方御定書』上下巻が完成し、乗邑によって幕府に献上されました。その後も、幕府成立後の129年の間に出版された法令の編さんに携わり、『御触書寛保集成』をまとめました。彼は法を順守する気持ちが高く、公正さを重んじる堅気な人物でした。ある時、無宿者が放火の罪で死罪と判決を受け、さらし者になっていましたが、アリバイがあることがわかり、再審を命じて刑の執行を停止させたとのエピソードも残されています。